

クリスマス・オラトリオを聴いて

原田 二郎

大村先生：

ご無沙汰いたしました。寒のただ中ですが、いかがお過ごしでしょうか。

さて、本当に遅くなりましたが、12月には<クリスマス・オラトリオ>他のコンサート、楽しませていただきました。新参の小生は、カンタータ以外を拝聴するのは初めてでしたので、この曲のように筋書きのある歌詞を旋律に無理なくのせる訳詞は本当に難しかろうと、そこを注目しておりました。演奏はもちろん、颯爽とモダンな合唱と心のこもったアリアを楽しみました。また全体に早めのテンポだったのに、第2部の例のシンフォニアが格別ゆったりと奏されたのがしみじみと印象的でした。

さてその詩の訳ですが、主情的な宗教詩であれば、逐語的な訳はある程度はしょって、リズムに合わせた大意詩をあてがっても許されましよう（それでも先生は極力、原文を尊重した訳を心がけておられるのはよく存じておりますが）、しかしオラトリオではまず省略できない、伝えねばならぬ事実の情報が多いわけですから、困難が倍加することと思います。小生は初めてでしたが、すでに何度も演奏なさっているとのことでしたから、訳詞などすでになんかの推敲を重ねていらっしゃるのでしょうか、実に良く練られた行き届いた訳詞だと今回も感服しました。

小生はそれをとくにアリアで感じました。たとえば第1部のバスのアリア、原語は省略しますが「なみしたもう 地のさかえ」の行、内容を十分に備え、かつリズムに乗ったじつに巧い歌詞です。小生はかつてこの曲のレコードをいきなり外盤で買いましたため、自分で訳のノートを作ったことがありますので、なかなかこうはとても出来ないというのが分かるつもりです。また、第3部のデュエット最後の行「新たにすなり み父のまことを」も、言われてみればこのとおりだな、とため息が出ます。このよう

に思わず唸ってしまう箇所は多々ありまして、原文の語彙・用語に厳しく則して妥協を排しておられる点が凄いなと思いました。

いま外側から申しましたが、まずもっと素直に申せば、前半3部の花とも言うべき各部のアルトのアリアを、小生のような素人もわが日本語で、自分の言葉で歌えるというのは、なんとという喜びでしょう。「そなえよ シオン まごころもて」、そう歌ってみるだけで嬉しくなります。

先生は今後もさらに改訂をすすめられることと存じますが、不遜にもリクエストをお許しただければ1点だけ。第2部、バスの2度目のレチタティーヴォで、原語では第2部のキーワードである Krippe（飼葉桶）という語が響くや、呼応して低音部がゆりかごの音型を奏し始め、つづくアルトの美しい子守唄に流れ込むようになっています。この打てば響く感じが、日本語でもそういう流れにできないでしょうか。先生、ぜひ頑張ってみてください。

今回、小生がある意味で注目していた箇所があります。第1部アルトのアリア直前のレチタティーヴォ中の

Auf, Zion, und verlasse nun das Weinen,
Dein Wohl steigt hoch empor

昨年とはまたトルコや台湾をはじめ多くの災害などがありました。幸せの季節であるはずのクリスマスを、笑顔で送れなかった人達も多かったはずですが、しかしこれに私たちは全員の問題として立ち向かっていきたいものです。

「いざ シオン はらえや 涙を
なが幸 あらわる」

この箇所が田中奈美子先生の、心のこめられたお声で歌われるのに感動しました。今回も、バッハの音楽のもっている美しい力強さに感嘆し、楽しませていただいたコンサートでした。

’ 99年最後を飾るクリスマス会開催

12月20日(月)午後7時から東京バッハ合唱団の忘年会でもあるクリスマス会が、目白練習場で開かれた。前々日の石橋メモリアルホールでの第86回定期演奏会と、その打ち上げ会を上野の北京飯店で盛大に楽しんだ後遺症で、やや参加人数は少なかつたものの、今年最後の締めくくりにふさわしい会であった。

当夜は、3年前の96年夏に、旧東ベルリンから大村先生宅を訪問して滞在した2人のお嬢さん、コンスタンツェとコーネリアのうち、姉のコンスタンツェが来日していて、会に出席した。彼女はルフトハンザ・ドイツ航空にスチュワーデスとして就職して、このほど19人のクルーとともに日本へのフライトで来ていたのである。97年夏には、東京バッハ合唱団ドイツ演奏旅行の際に、アイゼナハでの演奏会にベルリンから駆けつけ、一緒に歌ってくれたことも思い出される。

クリスマス会は、加藤さんの乾杯の挨拶ではじまり、ビールやワインその他の飲み物を飲みながら、持ち寄りのご馳走を食べ、つづいて、夏の合宿の映像など、松尾さんの写真をプロジェクターでながめながら一年を振り返った。

今年のおもな出来事は、

- 1月 大村先生の新居を訪ね、新年会を開催
- 5月 第85回定期演奏会開催
- 7月 創立記念祝賀会を市ヶ谷・学士会館で開催
- 7月18日 (アルト) 山本さんご結婚
- 8月 野尻湖合宿と神山教会特別演奏会
- 9月 ケルンからボンヘッファー教会のゲプハルト
牧師来日、目白・揚子江で歓迎会
- 10月 大村先生が岡山へ<ヨハネ受難曲>を聴きに出かけた。
中西さん、森永さんほか、お孫さんが生まれ、
今年はお孫さんブーム
- 11月 バッハ・カンタータ日本語版の出版決定
世田谷中央教会でクリスマス演奏会
インターネットでホームページを開設

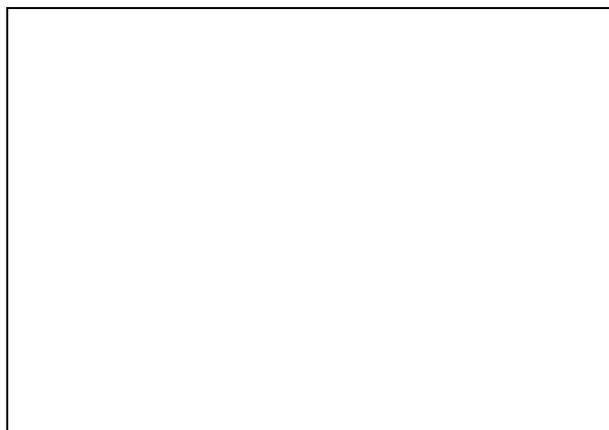
12月 第86回定期演奏会開催

などであった。

つぎに、出席者の方々のそれぞれのミニコンサートで、特にピアニストの内山さんとご主人のクラリネットとの二重奏と、星野亮・繭ご兄妹によるピアノ演奏などを楽しんだ。

ルフトハンザのクルーが宿泊している千葉県海浜幕張のホテルにコンスタンツェが帰る時刻が迫り、宴なかばではあったが、送っていくことにした。私と家内の2人で案内しながら、目白駅から上野に出て、地下鉄日比谷線で八丁堀へ行き、ここで京葉線に乗り換えて、コンスタンツェの降りる海浜幕張の一つ手前で降りた。私たちは武蔵野線で松戸方面に行くからである。

コンスタンツェは、明朝9時にホテルに迎えにくるバスで、クルーのメンバーとともに成田へ向かい、ドイツへ帰るのである。まだ19歳のスチュワーデス。またいつの日にか再会して、共にバッハを歌う機会があることを念じつつ、見送った。



カントル・バッハ —— 連載 15

第6章<音楽の献げもの>

ポール・デュ・ブシェ
訳：大村恵美子

<R. I. C. E. R. C. A. R. >

バッハがフリードリヒに送った楽譜の見返しの頁には、こう書かれています。「王の命により、歌とその他の部分はカノンの手法によって扱われている」Regis iussu Cantio Et Reliqua Cantonica Arte Resoluta。バッハは「カノンの」という語にこだわります。それは、ここでは単に「カノンを含む」ということを意味するだけでなく、また「可能なかぎりの最善の仕方」を意味するのです。

この献辞の語の頭文字は<R I C E R C A R>となり、<探す>という意味のイタリア語です。<音楽の献げもの>のなかには、たしかに<探す>べき多くのものが含まれています。(それまでに一度も書かれることのなかった)6声のフーガは、バッハによってもっとも深く探求された創作の一つです。

王の主題は、それ自体がかなり複雑なもので、リズム的に不規則だし、きわめて半音階的です。2つのフーガは、<フーガ>と書かれずに<リチェルカーレ>と書かれています。起源は<フーガ>の音楽形式をさす用語ですが、専門的なフーガの一形式、俗な耳にはたぶん厳格すぎるような、主知主義的なものを示すために、いまも用いられています。

バッハは名高い<音楽学術協会>の会員となる

音楽学術協会は、コレギウム・ムジクムの出身者ローレンツ・クリストフ・ミツラーによって設立され、優秀な音楽家たちからなっていて、難解な理論的問題をあつかう月刊誌を発行していました。構成員たちは、彼らの活動を理論や音楽実践のために貢献させなければならず、また同様に哲学や数学のためにも尽くさなければなりません。音楽領域でも彼らの科学的知識を証明するため、なにか理論的または実践的な作品が紹介されなければなりません。

バッハは、1740年来関心をもっていたのですが、それに所属することを長いあいだためらってきました。1745年にヘンデルが11人めの会員として協会に加わることを承諾すると、バッハの態度は変わりました。ただし、彼はさらにもう2年待機しました。14番めという数で彼が登録されたのは、決して偶然ではありません。この数字は、彼の名前<BACH>の数字なのです。

バッハはいつも、数に対して、いくらか迷信的な関係をもっていました。音楽は数学と関係なしに成り立つものではなく、また音楽的感性は、詩と数との神秘的な方程式をみたところにあります。和声法が、音楽の論理と話法とを同時に保証するものである、数字低音の体系にしたがって進行することを知っていれば、過度に拡大解釈するまでもなく、和声法の大家がどのように数の関係のうえに、彼の世界の独自の調査をうちたてることができたか、理解がつくのです。このように、心をひくものにあえて身を委ねたことに、知的な遊び一般、とりわけ数の理論に対する当時の好みということを加えてみると、バッハの生涯のなかでも、数による多くの偶発事件の説明ができるのです。14番めの会員として音楽学術協会に入会したことのほかに、例は豊富に存在します。

このようにして、<平均律クラヴィーア曲集>を開始する第1フーガの主題は、14個の音で形づくられます。視力を失なった死の床で、娘婿のアルトニコルに崇高なコラール<主よ、いま御身の御座にわれ進みいで>を書き取らせながら、バッハは、その第1行に14の音符を、旋律に41の音符をあてることを言明するのです。

後援会 会計報告

(1999年10月-12月)

収 入	477,500
内訳 後援会費	432,000
寄付	45,500
支 出	605,416
内訳 事務局費補助	210,000
渉外費	124,680
通信費	142,410
事務費	128,326
差 引	△127,916
前期より	328,737
累 計	200,821

後援会 年間報告

	1997年度	1998年度	1999年度
収 入	1,717,000	2,581,500	2,128,500
内訳 後援会費	1,575,000	2,428,000	1,964,000
寄付	142,000	153,500	164,500
支 出	1,816,722	1,984,814	2,055,026
内訳 事務局費補助	1,080,000	1,170,000	840,000
渉外費	207,000	98,600	342,280
通信費	316,813	252,802	435,585
事務費	182,909	231,681	337,161
諸会費	30,000	0	100,000
雑費	0	231,731	0
差 引	△99,722	596,686	73,474
前期より	△369,617	△469,339	127,347
累 計	△469,339	127,347	200,821

バッハ・カンタータ50曲選

出版ニュース

ドイツのブライトコプフ社との交渉も順調に進み、いよいよ楽譜制作が本格化してきました。

この<カンタータ50曲選>の企画は、日本の楽譜出版社に受け入れられるほどの収益は始めから見込めないもので、ある程度の模索のあと、合唱団の独自のプランによる自費出版に踏み切りました。対外的にも信用があり、かつて『バッハの音楽的宇宙』(丸善ライブラリー)を依頼されたご縁のある丸善株式会社と同系列の丸善プラネットに、出版実務を託すことになったのです。ここでは1996年に『バッハ宗教歌曲集』を自費出版して、楽譜出版としても経験を積んだところです。

ブライトコプフの既存のカンタータ200曲集の

後援会にご入会の方々

(1999年10月-12月、敬称略)

【新入会員】山本裕子・栄子

【継続会員】桜井知子、岩瀬房子、川戸龍夫、萩津雅夫、松原典子、吉井 修、小口幸成、長谷川田鶴子、重藤栄子、本郷容子、河野龍次郎、小島陽子、豊田雅子、安原美世子、武藤京子、小久保基子、森 彬、田中玲子、小川好計、田辺たつ子、小林まさ子、岡本シゲ子、酒井暁子、坂根隆司、猪狩恭子、落合武四郎、布施(近藤)靖子、板木 亮、澤田 望、村松政子

【寄付】高崎弘子、猪狩恭子、宮本弘子、山本裕子

【切手多数】原田知子、福田かおり

中から50曲を選び、その楽譜をそのままにしながらドイツ語歌詞の下に日本語歌詞を加えるという作業は、音楽体験のあるものにしか、理解しにくい数々の技術的な問題点があり、そこで今回は、団員でもある大村健二が、楽譜編集作業の先端に立ってコンピューター処理にたずさわることになりました。新年早々、全50冊や第1回配本10冊の予約注文が舞いこみ、コンピューターの周辺機器や処理ソフト購入などに支出一方の苦闘さなかに、大きな励ましを与えてくださっています。

第1回配本分のうち、5月14日定期演奏会で上演予定のBWV56、106、156の3曲についてはとくに、5月の刊行予定をまたず、印刷製本され次第すぐにお届けしようと思います。どうぞ、予約申込期間中に、多くの方々のお申し込みがいただけますよう、お待ちしております。